

国衙跡保存整備基礎調査 概要報告書Ⅳ

寺崎遺跡第8次調査



2000.3

宮崎県教育委員会

序

本書は、日向国府・国衙跡の解明とその保存・活用に向けての基礎資料を得るために実施している、国衙跡保存整備基礎調査の概要報告書です。

昨年度の調査では、正殿と推定される建物跡が確認されるという、画期的な出来事がありました。引き続き行った今年度の調査におきましても、主要殿舎の一部と見られる遺構や区画の塀、溝が検出され、円面硯などの官衙関連遺物が出土するなど、重要な成果が得られております。

ここにまとめられた成果が、学校教育や生涯学習の場で幅広く活用され、文化財保護のための指針になることを切に願います。

なお、今年度も妻北地区の地権者の皆様から、調査に多大なご協力をいただきました。末尾ながらここに記して感謝申し上げます。

平成12年3月

宮崎県教育委員会

教育長 笹山竹義

凡 例

1. 本書は、宮崎県教育委員会が国庫補助を受けて実施した国衙跡保存整備基礎調査の概要報告書である。
2. 平成11年度の確認調査は、西都市大字右松字塚田に所在する寺崎遺跡の6か所を対象に、平成11年4月2日から平成11年3月末日まで実施した。
3. 本書の執筆・編集は、宮崎県教育委員会文化課埋蔵文化財係主査 吉本正典が担当した。
4. 調査にあたっては、調査指導委員会の委員や特別調査員の先生方にご指導をいただいた。
5. 遺構番号は 西暦年(年度)下2桁+001 …とする。従って今年度は99001 …となる。

本文目次

第I章 はじめに	1
第II章 調査の成果	3
第1節 調査の概要	3
第2節 寺崎遺跡確認調査(第8次調査)の成果	3
第III章 まとめ	16
図 版	19
抄 録	25

第I章 はじめに

第1節 調査の経緯と組織

1. 調査の経緯

日向国府の所在地については、「和名抄」その他の文献の記載や地名、古瓦の分布などから、いくつかの推定地が示されていたが、考古学的資料の蓄積がないため確定には至っておらず、都市化の進行に伴って遺跡の破壊が懸念される状況となってきた。

そのため、宮崎県教育委員会では国庫補助を受け、昭和63年度から平成2年まで国衙・郡衙・古寺跡等遺跡詳細分布調査を、平成3年度から平成7年度まで国衙・郡衙・古寺跡等遺跡範囲確認調査を行った。

その結果、寺崎遺跡において、方形の柱廻形の掘立柱建物や、畿内地方からの搬入品と見られる土師器杯蓋などが確認され、さらに平成7年度に実施した地下レーダー探査の結果、遺跡の南西部付近で直角に曲がる溝状遺構の反応が確認された。その一部は実際に検出され、7世紀末～8世紀後半の須恵器、転用硯、凸面横方向縄目叩きの平瓦などの遺物が出土してことから、中心部の一郭を区画する施設と推測されている。

それらの調査成果を踏まえ、宮崎県教育委員会では平成8年度から5か年計画で国衙跡保存整備基礎調査に取りかかることになった。平成10年度の7次A区の調査では、正殿と推定される大形の掘立柱建物（後に礎石建物に建て替え＝掘立柱建物 98001）や、長舎状の掘立柱建物跡（掘立柱建物98002・98003）が検出されるなど、大きな進展をみた。

2. 調査の組織

平成11年度の本調査の調査体制は以下の通りである。

調査主体 宮崎県教育委員会

教育長 笹山竹義 教育次長 新垣隆正 教育次長 岩切正憲

文化課長 仲田俊彦 課長補佐 矢野 剛 主幹兼庶務係長

井上文弘 埋蔵文化財係長 北郷泰道

関係市町村教育委員会

指導監督 文化庁

調査指導委員会 小田富士雄（福岡大学人文学部教授） 山中敏史（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター集落遺跡研究室長） 日高正晴（宮崎県文化財保護審議委員） 永井哲雄（宮崎県史編さん室顧問） 阿萬美水（元宮崎県立高校教諭）

調査員 吉本正典（文化課埋蔵文化財係主査）

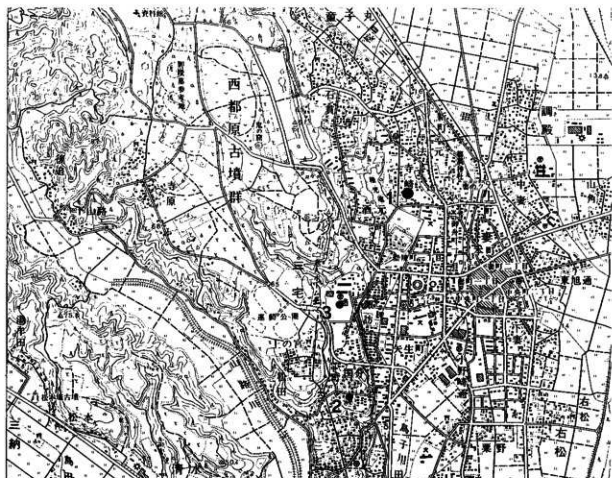
特別調査員 日野尚志（佐賀大学教授）

永山修一（鹿児島ラサール高等学校教諭）

柳沢一男（宮崎大学教育文化学部教授）

表：国術跡等関連調査一覧（平成8年度～11年度）

年次	調査	内 容	備考・関連事項
平8	国術跡保存整備基礎調査	寺崎遺跡5次	掘立柱建物跡
平9		寺崎遺跡6次	掘立柱建物か欄列 溝状遺構
平10		寺崎遺跡7次	掘立柱→礎石建物（正殿） 東西棟長舎型建物2棟
平11		寺崎遺跡8次	掘立柱→礎石建物（東脇殿）、溝状遺構、築地掘など



- 1 寺崎遺跡 2 日向国分寺 3 諏訪遺跡（尼寺推定地）

第1図 遺跡位置図(1/50,000)

第II章 調査の成果

第1節 調査の概要

昨年度の調査成果を踏まえ、A区では東脇殿の検出を、B区では正殿およびその関連施設の広がりを、C区は東限の確認を目的として調査区を設定した。

また、D区は平成2年度に実施した1次調査区の西隣にあたり、1次調査で一部検出された掘立柱建物や溝状遺構の全容を確認することに主眼を置いた。

E区は、D区と7次調査A区の間部分であり、正殿建物の北隣にあたるため、後殿の検出に期待が持たれた。

G区・H区は地下レーダー探査の結果存在が想定されていた溝状遺構の確認を目的とするものである。

基本層序等については、昨年までの概要報告を参照されたい。

第2節 寺崎遺跡確認調査(第8次調査)における成果

A区(マ-22区)の状況(第3・4図)

調査区を設定したところは、宅地に囲まれた畑地であり、標高は7次A区とほぼ同じである。宅地に囲まれていて大形の機械が入らなかったためか、遺構の残存状況が良好で、表土下約30cmで遺構の検出が可能であった。

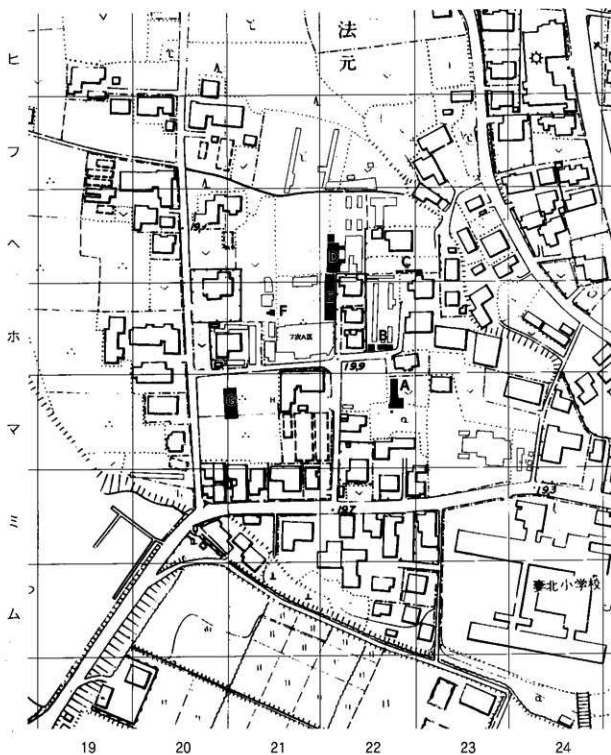
調査の結果、南北に並ぶ9基の柱穴が検出された。北側については耕作の影響が大きく不明瞭であったが、南側の5基については礎石掘方が重複して認められた。黄白色粘土により根石を掘え付けており、7次A区で確認された正殿建物と同様の基礎構造となる。原位置を保ってはいないが、礎石とおぼしき礫も見られた。

それらは、位置から見て東脇殿の柱穴の可能性が高かったため、対応する柱列の検出を目指したが、耕作のため広い調査区が設定できず、西側で2基の柱穴を検出したにとどまった。付近は全体に攪乱が著しく、柱穴の下底近くでの確認であったため、掘方の規模がやや小さいが、同じ建物の柱穴と認定して良いと考えられる。

一方、東側においても柱穴が検出されたが、9基の柱穴の並びとは対応しない。検出面近くで黄白色粘土や古瓦の集積が見られたことから、東辺を画する掘立柱塀の柱穴列(塀99005)と考えている。

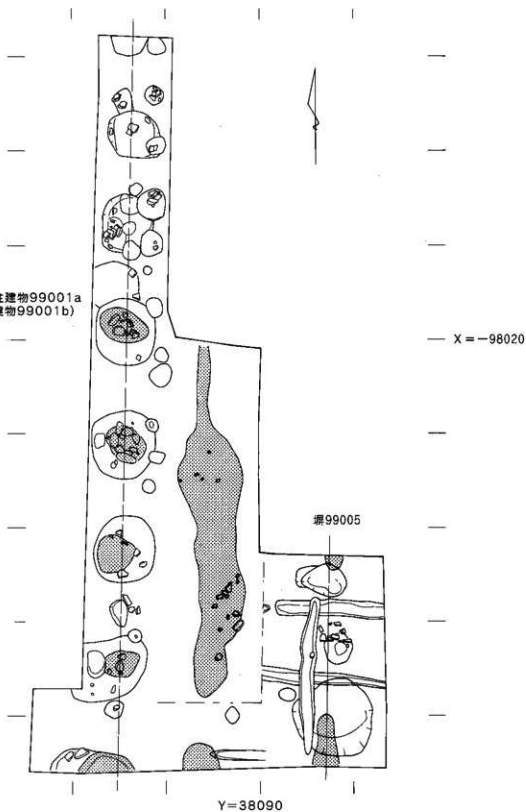
以上のように当区には桁行8間以上・梁間2間の南北棟建物(掘立柱建物99001a)があり、同位置で建て替えられている(礎石建物99001b)ことが判明した。当初の想定通り、東脇殿であると考えられる。その東側にはごく浅く幅も一定しない黄白色粘土の詰まった溝(とするより粘土の帯と表現した方が適当か)がある。掘立柱の柱掘方は一辺約1.4m、礎石の根石掘方は大きいもので径約1m、平面での確認では柱位置が判然としなが、おそらく8尺等間であったと見られる。また東側の柱穴の脇には柱掘方を切る形でいくつかの小穴が存在する。足場穴であろうか。

当区では、整地層面でも遺構の検出が可能であったため、基本的にⅢ・Ⅳ層まで掘り下げを行っていないが、東側の一部でⅢ層面まで掘り下げを行った。その結果、南北・東西方向に走る小溝が確認された。官衛成立期の地割りに関連する溝であろうか。



第2図 調査区位置図(1/2,000)

掘立柱建物99001a
(礎石建物99001b)



※網かけ部分はb期の遺構

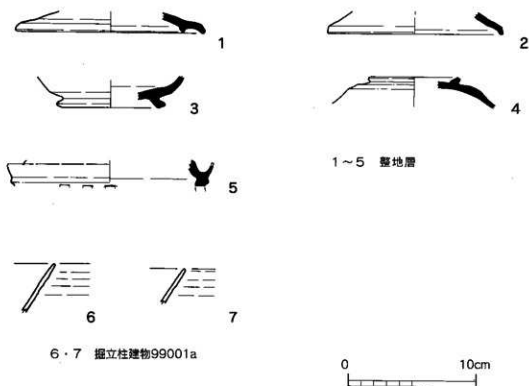
第3図 A区遺構分布図 (1/80)

遺物は7次A区同様、供膳形態土器の割合が高い。また古瓦の出土量が特に多く、細かなデータは示し得ないが、その出土割合はおそらく全調査区の中で最も高いと推測される。

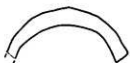
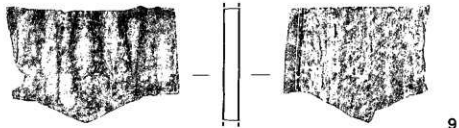
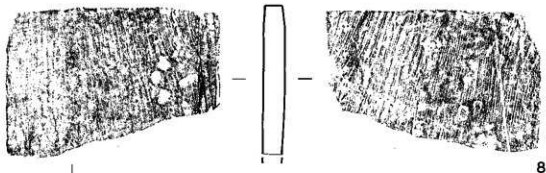
1～5は整地土層出土の土器である。官衙成立前後のものと思われる7世紀後半～末の遺物を含む。5は円面硯である。

掘立柱建物 99001の柱掘方内から古瓦や土器の細片が出土したものの、年代比定の根拠となるような資料は稀少であった。

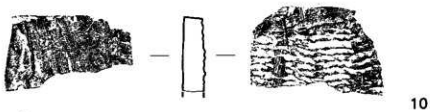
第5図には出土瓦を掲載している。凸面粗縄叩きの平瓦が圧倒的に多い。若干量の丸瓦も認められる。



第4図 A区 出土遺物 (1) (1/3)



8·9 掘立柱建物99001



10 包含層

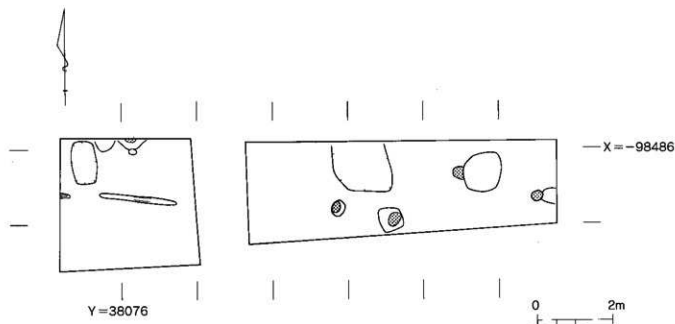


第5圖 A区 出土遺物 (2) (1/4)

B区 (へ-22区) の状況 (第6図)

正殿建物の東側にあたる。A区で検出された東脇殿の北妻柱列が、正殿の南側柱列の柱筋に揃えるような配置であったとすると、この調査区で柱穴が確認できることになる。また、7次A区の孤立柱建物 98004 と対になる建物が存在した場合も、当調査区で検出可能となる。

しかし、結果として、いずれの建物跡も検出できず、わずかに埋土に黄白色粘土を含む柱穴が検出されたのみであった。

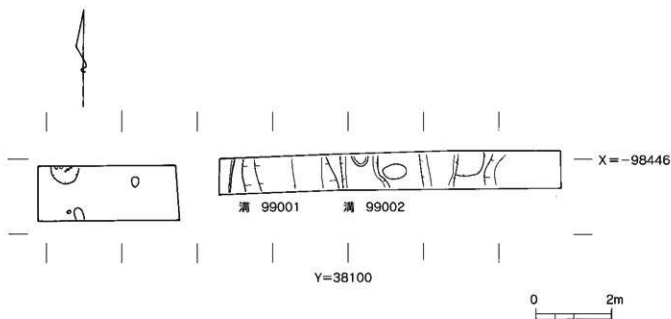


第6図 B区 遺構分布図 (1/100)

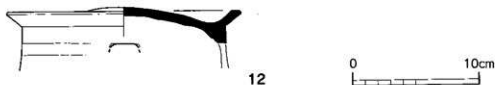
C区 (へ-22・23区) の状況 (第7・8図)

家屋脇の空き地に調査区を設定したため、十分な幅がとれず、いくつかの溝状遺構が確認できたものの、時期等の詳細については明らかにすることができなかった。

遺物では、II層中より出土した円面硯(12)が注目される。脚下部を欠くが、硯部は比較的良好に残る。陸部に擦過痕など使用の痕跡が残らず、ほとんど未使用に近いものと見られる。



第7図 C区 遺構分布図 (1/100)



第8図 C区 出土遺物 (1/3)

D区（へ-22区）の状況（第9・10回）

1次調査区の西隣にあたる。1次調査では、掘立柱建物の一部と推定される柱穴列が確認されており、今回の調査の結果、それが東西棟の掘立柱建物であることが判明した(掘立柱建物 99002)。一部、近世の溝(溝 99003)に切られるが、桁行5間・梁間2間の身舎の北側に庇が付く構造であることが確認できた。さらにその南側柱列と柱筋を揃えて東西方向に続く柱穴列がある。

柱掘方は不整形で、一辺長約0.9~1.2mを測る。一部の柱穴を半裁したところ、やや不明瞭ながら柱痕跡を確認できた。桁行柱間寸法は2.4m(8尺)、梁間柱間寸法は2.1m(7尺) 底の出は2.4mとなる。出土遺物より9世紀後半の所産と考えている。小破片ながら緑釉薬陶器も出土している。

また東西方向にのびる溝状遺構がいくつか確認された。このうち溝 99004は、検出面での上面幅が約2mに及ぶやや大きなもので、調査区東端で終結する。上面に古瓦を含む土器集積箇所が見られた。25はそのうちの1つで、9世紀後半には完全に埋没していたことが判る。この溝99004と南北溝97008 (=94004)は、黄白色粘土や基盤層ブロックを含む覆土の特徴が似ているため、同一の溝であると考えている。

この溝 99004を切る形で、塀 99002が築かれている。塀 99002の柱穴埋土は、掘立柱建物 99002のそれと共通する特徴を備えており、遺構方位から見ても、同一時期の所産として良いと考えられる。

溝 99004の北側には、東西方向にのびる柱穴列がある(塀 99002)。

溝 99005と溝 99006は茶色味かった覆土の特色が似通っており、また溝 99007と溝 99008は、黄白色粘土や基盤層ブロック、鉄分凝集層、古瓦を含む覆土の状況が共通する。このため、それらは対になる同時期の所産で、築地塀の側溝と見て良いであろう。いずれも間隔は約2mとなる。

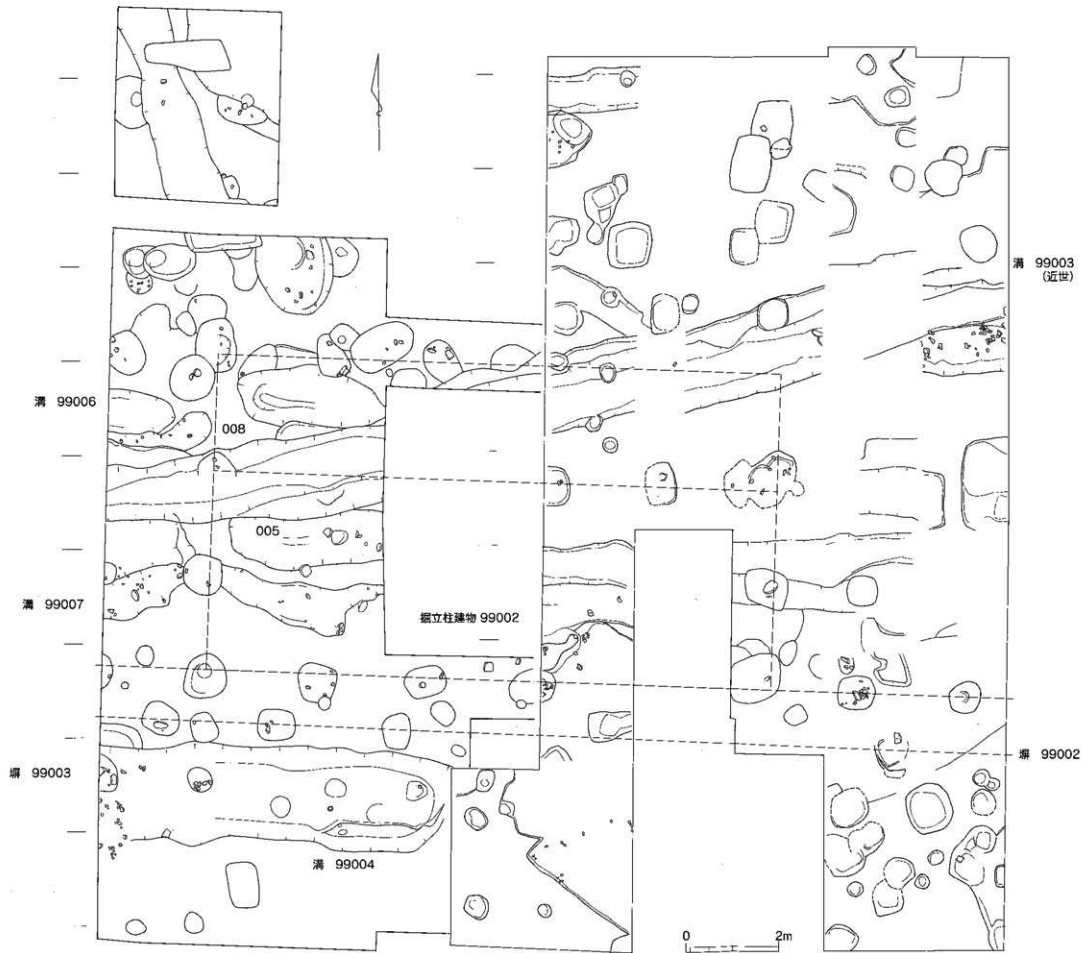
また、調査区北端近くで検出された柱穴の中に、7次A区で検出された掘立柱建物 99002の柱穴に埋土の土質の類似するものがあり、並びは確認できなかったが、それと対になる可能性もある。

以上のように、当調査区では、東西方向に走る塀や溝などの圍繞施設が重複して存在しており、一貫して官衙の北縁にあたるどころであったと考えられる。

図示した遺物のうち、13~19が掘立柱建物 99002の柱掘方より出土したものである。18は脚台鉢、19は円盤状高台付きの杯である。

24は溝 99004の東縁部付近から出土した土馬である。須恵質で、胴部は中空となっている。

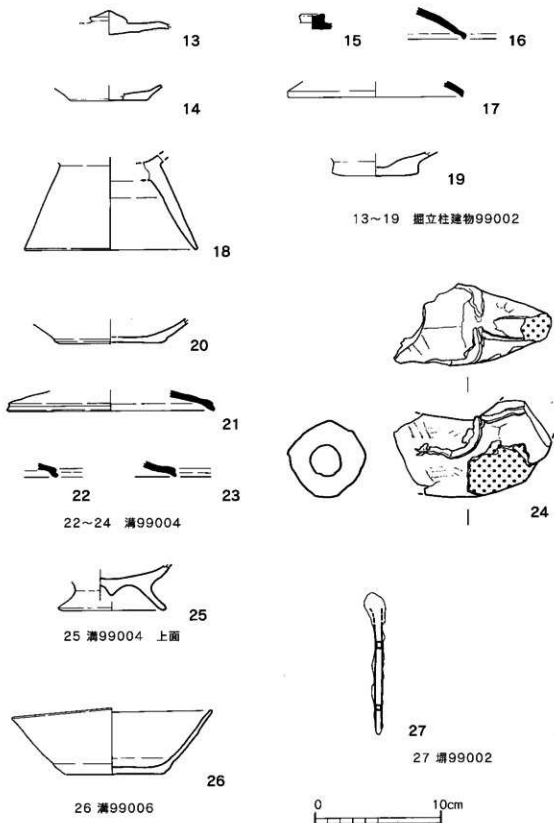
27は塀 99002出土の鉄釘である。



今年度 (8次) D区

第9図 D区 遺構分布図 (1/100)

1次調査区



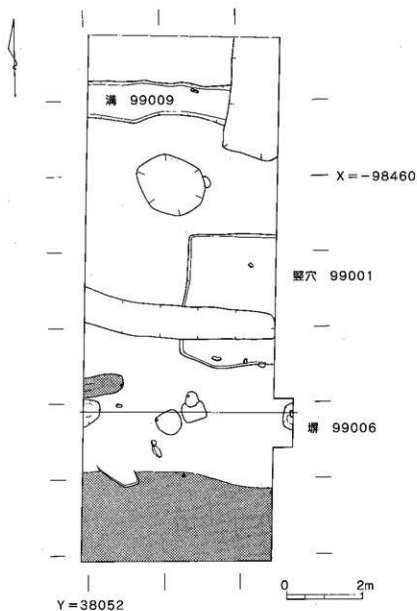
第10圖 D区 出土遺物 (1/3)

E区(ホ-22区)の状況(第11図)

前述の通り、後殿に相当する建物跡の検出を念頭に置いて調査にあたった。

結果、調査区南端で正殿建物(掘立柱建物 98001)に関連すると見られる黄白色粘土の積土が確認され、そのやや北側に柱穴3基の並びが確認された(塀 99006)。柱掘方はやや不整な方形を呈し、一辺長約0.8mを測る。黄白色粘土の詰まった小溝が並行して走っている。

塀 99006は、その特徴から、掘立柱建物 98001a(礎石建物 98001b)と同時期の、国庁を囲する掘立柱塀と推定している。

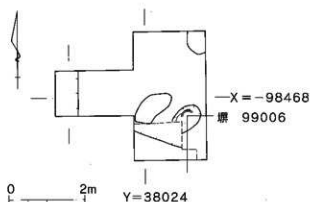


第11図 E区 遺構分布図(1/100)

F区（ホ-21区）の状況（第12図）

E区で掘立柱塼と見られる柱穴列が検出されたため、その西側延長線上に調査区を設定した。6次C区と2次調査区の間にあたる。

結果、塼 99006の延長線上に柱穴が検出され、直角に曲がって2次調査区の方角にのびていると推定されることとなった。半截の結果、柱痕跡ははっきりしなかったが、柱穴下底部の柱の当たりから、柱は径20cm程であったと見られる。



第12図 F区 遺構分布図（1/100）

G区（マ-21区）の状況

溝 94004は、地下レーダー探査の結果、南側で直角に曲がると想定されており、その当否を確認するため、調査区を設定した。

掘り下げの結果、地表下約40cmで南北方向に走る溝状遺構を検出した。隅角部分は調査区南端よりもさらに南側にはずれるようである。

この溝の西肩部を切る形で、溝 99010が南北方向に走る。この溝の埋土中には版築土ブロックや黄白色粘土を多く含む。重複する溝（溝 99011）も見られる。二期にわたる築地塼の側溝であろう。D区検出の溝に対応するものか。

なお、溝 94004の上面から9世紀後半の遺物が多量出土している。D区の溝 99004同様、9世紀後半には完全に埋没していたことが判る。

H区（マ-21区）の状況

G区で溝 94004の隅角部分が検出されなかったため、溝の南縁を知るべく、調査区を設定した。

その結果、2条の並行する溝が検出された。土器片や占瓦を多量含む。G区の溝 99010、溝 99011に対応するものか。

第三章 ま と め

今年度の調査では、昨年度に正殿建物が検出されたことを受け、さらに主要殿舎の配置や圍繞施設を確認することを目標に、ピンポイント的なものを含め、8箇所の調査区を設定した。

その結果、東脇殿（掘立柱建物 99001）の検出や、国庁を囲う掘立柱塼、北面、西面、南面の区画施設の確認など、大きな成果を得ることができたと考える。

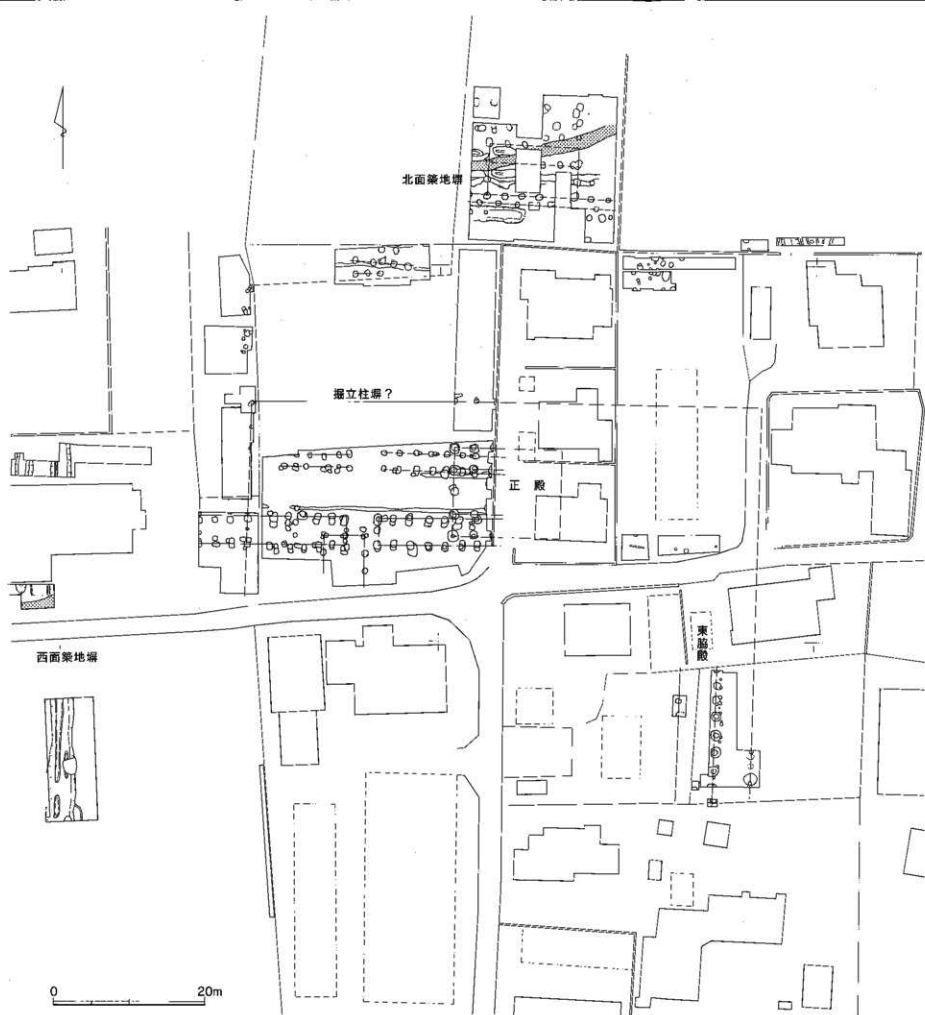
掘立柱塼 99005・99006は、一部の確認にとどまるが、2・3次調査区に、これにつながると見られる柱穴列が存在する。それらに囲まれた内部に、「品」字形配列の正殿・脇殿が在ったことになる。

築地別は、塼本体は基底部のみの確認にとどまるが、G区の側溝覆土中より版築土ブロックが出土しており、存在の確証を得ることができた。

また、年代比定の上では、北辺建物・掘立柱建物 99002の寄与するところが大きい。この建物の柱穴掘方内からは比較的多量の遺物が出土しており、9世紀後半の基準的な土器を含む。緑軸陶器の出土もそれと矛盾しない。

溝 99004は、その掘立柱建物 99002と同時期の所産と見られる塼 99003に切られるため、9世紀後半の段階では完全に埋没していたことが判る。溝 99004の上面にはおびただしい数の9世紀後半の土器片が見られ、該期には、付近を整地し、国庁域を拡張したと判断できるのではなかろうか。

なお、第13図は、これまでの国庁域周辺の調査により検出された遺構を示している。



第13図 国行城遺構分布図 (1/500)



調査区 (D・E区付近) 近景



A区 掘立柱建物 99001 (北東より)



A区 堀 99006 (北より)



A区 掘立柱建物 99001 柱穴半截 (北より)



B区全景 (西より)



C区全景 (西より)



D区 全景 (南より)



D区 掘立柱建物 99002 南側柱穴列



D区 溝 99004 (西より)



E区 全景 (南より)



E区 堀 99006 (北西より)



G区 溝 94004・99010 (築地堀・北より)

報告書抄録

所収遺跡名	所在地	緯度	経度	
寺崎遺跡 ^{てらさき}	宮崎県西都市大字右松字別田 ^{ほね}	北緯32°6'40"	東経131°24'10"	
調査期間	調査面積	調査原因	種別	主な時代
H.12.4.2~13.3.31	550m ²	史跡整備関連	官衙・集落	古代・中世
主な遺構	主な遺物	特記事項		
掘立柱建物・礎石建物 築地塀側溝・溝状遺構	土師器・須恵器・陶硯 緑釉陶器・土馬	東脇殿検出、「品」字形遺構配列の 確認、築地塀確認		

国衙跡保存整備基礎調査
概要報告書Ⅳ

寺崎遺跡第8次調査

2000年3月31日

発行 宮崎県教育委員会
〒880-0805 宮崎市橘通1丁目9番10号

印刷 有限会社富士写真印刷
〒880-0212 宮崎県佐土原町下郷河
電話 0985(74)2179